

*Helicobacter pylori*の簡便な染色法

柳田潤一郎、今西麻樹子
森松 伸一

Helicobacter pylori (H. p) は、微好気性のグラム陰性らせん状細菌で、1982年にWarrenとMarshallが培養に成功して以来、胃炎、胃潰瘍の原因菌と認められ、以後さまざまな検討が行われている。

H. pは、ライフサイクルの中で、形態的に、らせん状と球状を示すことが知られている。しかも球状菌は染色性が悪く、両方の形態を染色標本として、光学顕微鏡で検査する方法は、これまで十分に行われていない。

そこで、簡便に両方の形態が染色可能な条件設定の検討を行った。

(方法) *Helicobacter pylori* ATCC43504株を、ピロリ培地で37℃、微好気条件で4日、7日および14日間培養し、塗抹標本を作った。

染色液として、レフレルのメチレンブルー液、ギムザ液、チールの石炭酸フクシン液およびサフラニン液で、それぞれ1分～5分間染色後、光学顕微鏡で1000倍で観察し、写真撮影を行い比較した。

(結果および考察) 染色標本を比較検討した結果、チールの石炭酸フクシンで1分間染色した場合が、らせん状、球状にかかわらず、よく染色された。

この結果、球状のものには、大小2種類あることも判明した。

また、蛍光抗体法および電子顕微鏡での観察を行い、らせん状、球状にかかわらずH. pであることが確かめられた。

以上より、この条件設定は、

- 1) 試薬・染色液の調整および染色手技が簡便で、所要時間が短いこと。
- 2) 検査を行う上で、個人差がないこと。
- 3) らせん状菌と球状菌の割合を容易に知ることができること。

の点で、有用であると思われる。

今後、胃生検材料のスタンプ標本の染色を検討する必要があると考えている。